

私の素敵な 「ロールモデル」



おんなの視点

東京電力㈱立地地域部 広報グループ 石橋 すおみ

原子力広報の仕事に携わって8年になる。文系出身の私が、営業部門からいきなり原子力発電所勤務になったのだから、始めは必死だった。自分が勉強することに精一杯な日々が一年ほど続き、ようやく原子力広報の仕事がおもしろくなってきた頃、ふと気づいたことがあった。

自分が目標とする女性の先輩が周囲に存在しないということだ。営業部門に所属していた頃は、女性の管理職も多くいたし、あこがれる女性の先輩もいた。しかし、原子力部門には女性の先輩は皆無だったのである。急に目の前が真っ暗になった。それで仕事が嫌になったり、めげたりする私ではないが、この先自分はどうなるのだろうかと思然とした不安に駆られた記憶がある。

そんなとき、WIN（ウィン）と出会った。私の勤務する柏崎刈羽原子力発電所へ訪れた一行と、発電所女性職員との懇談の場に呼ばれた私は、彼女たちの話に「目からうろこ」であった。WIN（Women in Nuclear）は、原子力や放射線の仕事をする女性のネットワークで、現在、世界68か国に2000人以上の会員を有す。その日本組織であるWIN-Japanは、電力会社やメーカー、研究所などに所属する女性からなり、会員が120名ほどである。

電力会社で広報の仕事をしている人、メーカーで原子炉の設計をしている人、低線量放射線の研究をしている人など職域は多種多様だが、彼女たちの話からは、自分の仕事に対する誇りが感じられた。会社という枠を出れば、原子力に従事する女性がこんなにたくさんいるのだと驚いた。

この出会いをきっかけに、私はWIN-Japanに入会し、今年から理事を務めさせて頂いている。WINの会員になってからは、その世界的なネットワークを通じて、様々な国の女性達と

出会うことができた。WINの国際会議で出会う外国の女性は魅力的で、子連れで出席している原子力発電所長（仏）や、出産の前日まで働いていたわ！という広報部長（米）もいた。

日本の原子力分野の女性比率は数%と、ヨーロッパの20%程度と比較すると非常に少ない。原子力学会も機械学会などと並んで女性の割合が非常に少ない。あるNPOの調査によると、職場満足派の女性ではロールモデルがいるとの回答が3割、逆に職場不満派ではロールモデルがいるとの回答が1割以下とのこと。

女性が仕事をしていく上で、身近にロールモデルを有することは非常に重要だ。起業して成功した女社長や、賞をとった科学者のようなスーパーロールモデルではなく、ごく普通に楽しく仕事をする身近なロールモデルでよいのだ。身近なロールモデル、つまり目指すべき人との出会いが大きいのではないだろうか。あの人みたいになりたいとか、あの方が言うからやってみたとか、人に対して最も影響力があるのはやはり人なのだと思う。

WINというネットワークを通じて、会社の中だけでは得られない身近なロールモデルに出会えた私は本当に幸せだ。女性の生活や人生は男性以上に様々なので、ロールモデルは多ければ多いほど良い。先輩達からもらう元気と勇気と励ましが、今の私が、楽しく仕事をする原動力になっている。

今、WIN-Japanでは、原子力を専攻する女子学生に対する進路支援策を検討している。私は、原子力分野における女性のロールモデルを提示することに取り組みたいと考えている。原子力が広く社会から受け入れられるためには、原子力分野で多くの女性が生き活きと、やりがいと誇りを持って働き、そういう女性が、多くの人達に自らの言葉で原子力を語りかけることが大切だと考えるからである。